

# なぜか幸せな心臓手術 ⑧

高橋 一郎



映画監督でありCOMLのボランティアメンバーでもある高橋一郎さん。

昨年心臓の大動脈弁置換術を受けられたのですが、  
そのご経験について「**すごく幸せで、病気になってよかった**」とおっしゃっていました。  
その体験を連載で綴っていただいています。

## ● 患者模様

私は列車に乗っていた。傍にまだ幼い息子が座っている。列車は峡谷を走っており、窓からは豊かな水量でゆったり流れる川と青空に映える緑の山の景色が見えていた。そのうちに窓の半分のところまで水面が来てしまった。あれれと思う間もなく列車は川にもぐっていき、窓の風景はまるで水族館にいるようだった。私と幼い息子はその風景に見入っていた。アシカのような動物が泳いでいた。老人のブツブツいう声が聞こえてきた。夜中に隣のベッドにきた老人が、看護師たちに何か言っているのをウトウトしながら聞いていた。老人Sは急な入院をしたが自分では覚えていないらしい。したくもない入院をしていることに怒っているようだ。

入院しているといろいろな患者と出会う。昨夜は向かいのお兄さんが咳き込んで随分苦しそうだった。それは大変に気の毒なことではあった。しかしお兄さんは咳の苦しさを紛らわそうとして夜中にテレビをつけているのだった（それもイヤホンをつけずに）。これにはさすがに参ってナースコールをし、看護師さんに何とかしてほしいとお願いしたのだった。お兄さんは空いている個室へ移っていった。

昼食後に少しウロウロしようと思って廊下を散歩しているときだった。歩いているといろいろな声が聞こえてくる。ある個室の前を通ったときおばあさんの声が聞こえてきた。相手は栄養士のような人だった。栄養士はおばあさんに減塩の食事についての話をしているのだったが、おばあさんは「そんなことはやらん」といちいち反抗している様子だった（頑固な人だな）。

夜中に入院してきた老人Sも朝から看護師を困らせている。「Sさん、背中にシール貼らせて」「背中にシールなんか嫌や」「胸に貼ったらまた取ってしまうでしょ?」「足やったら貼らせたる」「点滴の針を入れさせてもらいますね」「夕方抜くって言うてたんと違うんかい」「Sさん、覚えてらっしゃらないかもしれませんがご自分で針

抜いちゃったんですよ」「先生このこと知ってるんかい」「ハイ」「明日から絶対針は入れさせへんからな」「今点滴は二本入れる必要があるんです」「あかん、それやめて、あんたの言い分聞いてたらキリないわ。明日わしは逃げ出すからな」。結局脚に点滴の針が入った。「点滴の針が入りました、ありがとうございます」。老人は退院したくてたまらない。その後も看護師が点滴や採血を頼んでも、「イヤ!」の一点張りだった（困った人だな）。

## ● 院長らしき人

薬の袋が手元に7つある。袋①は錠剤2種類、朝食後。袋②は錠剤1種類、朝食後。袋③錠剤1種類、朝食後。袋④錠剤1種類、朝食後。袋⑤錠剤2種類、朝食後、昼食後、夕食後。袋⑥錠剤1種類、夕食後。袋⑦錠剤1種類、朝食後、夕食後。注意深く飲まないで間違ってしまう。ちゃんと飲んでるか看護師さんがいちいち点検してくれる。

今朝も間違いなく薬を飲もうと袋をゴソゴソしていると、院長回診らしきものがあつた。

院長らしき人物とC医師、E医師が目の前にやってきた。E医師が私の経過を院長らしき人に説明している。なぜ院長らしき人と呼ぶのかというと、その院長らしき人は一度も自己紹介することがなかったからだ。挨拶がないから私もどうしてよいのやら要領がわからず、私は下を向いたまま袋をゴソゴソしているのだった。決して悪い人には見えないが、この人はなぜ自己紹介しないのだろうか、と不思議だった（なんて間が悪いんだろ）。

二回目の手術をしてから一週間たった。思いもよらない二回目の手術だった。その後の痛みには弱ったが、何とか峠は過ぎた。E医師が傷口の抜糸をしてくれた。「もうくっついてますね、早いですね」ということだった。退院は順調にいつて週末くらいということだった。やっと出口が見えて来て安心した。

## ● リンゴとカフェラテ

出口が見えてきたからといっても、体調は一進一退だった。記録を見るとこんな具合である。3月〇日、朝食後、体温37.1度。眠い感じがするのでベッドで座ったまま少し眠る。起きると体温37.8度。しばらくしてリンゴが欲しくなり、1/4を切って食べる。体温37.1度。眠気はなくなり気分はおちついた。昼食にリンゴをまた1/4プラスして食べる。13時、36.8度。17時、37.8度。肩が寒気を感じる。ベッドに移動。18時、ラウンジで夕食にプラスでリンゴ半分。食べているうちに気分がよくなる。ずいぶんリンゴを食べたものだ。一回目の手術の翌朝CICUで食べたリンゴの味が忘れられなかった。それからカミさんに頼んでリンゴを持ってきてくれるのを楽しみにしていた。リンゴをかじると酸味と甘みと水分とが身体にしみわたるように感じた。健康なときはひと味違う感覚だった。そう感じたのはきっとからだが必要だったからだろう。「いのちの水」がからだにしみ入るように感じたのだった。

食べ物でもうひとつ気に入っていたのはお菓子だった。お菓子といってもそう甘くはない。玄米のビスケットの間にチーズクリームがサンドされている補助食品のようなものである。からだがかしんどいときは別だが、体調が戻ってくると病院食だけでは物足りない。そんなときにこの玄米のお菓子を愛用した。

コーヒーはエレベータで地下まで行って買う。普通のコーヒーの自動販売機はたくさんあったが、その自動販売機は地下にしかなかったからだ。豆を挽いてくれる自動販売機でメニューにあるカフェラテ(砂糖抜き)が気に入ってしまった。これはおいしかった。だから私は水のペットボトルとカフェラテを買うために随分とエレベータを使ったものだ。水といえば、この病棟のラウンジには飲み物の自動販売機がないのであった。なぜなのか。それは検査や治療によって水を飲むのを制限する必要があるので、患者が間違っても水を飲まないようにするためと看護師さんが教えてくれた。

車椅子を押して一階下の自動販売機で水のペットボトル2本を買い、一階まで下りて売店で玄米のお菓子を買って、さらに降りて地下の自動販売機でカフェラテを買う。これを車椅子に乗せて病室へ帰ってくる。一本の水だけ冷蔵庫に入れておき、あとはそのまま車椅子に乗せて今度はラウンジに向う。途中CICUでお世話になったg看護師と出会った。「あら、もうそんなにお元気そうに」「ありがとうございます、おかげさまで」。g看護師の嬉しそうな表情。彼女の気持ちがジンと伝わってくる、ウソがないからしっかり伝わる。

ラウンジではテーブルの椅子を使うこともあったが、

車椅子に座ることも多かった。背もたれのしなり具合がとてもフィットして気持ちよかったのである。安楽椅子のようだった。ゆっくりカフェラテを飲み、お菓子を食べて、本を読む。ぜいたくな時間だった。

## ● 痛風

左足の親指の根元が少し痛むのに気づいた。(え、痛風なの?)。私は痛風持ちだが少なくともここ数年は症状が出た覚えがない。(でもこれは痛風の感じだよな)。私は自分の痛風がどんなタイミングで出るかわかっているつもりだ。ストレスと関係がある。ストレスがかかっているときではない。ストレスが抜けるときなのである。いままでの経験でいうとストレスが抜けるタイミングで痛風が出た。今回も考えてみればそれにあてはまる。心臓手術という大きなストレスを受けた。しかも予期せぬ二回の手術であった。とりあえず大きな山場は越えたが今日で入院は12日目である。そろそろ2週間になろうとしている。これは痛風が出てもおかしくないタイミングだった。E医師が来て、痛風の様子を診てくれた。痛み止めを出しますということだった。入院中に痛風が出る人は割に多いそうだ。「なぜでしょうね」とE医師がいうので「私の場合はストレスです」と答えた。

翌朝起きてみると左足親指付け根の痛風はかなりおさまった感じだった。ところが今度は左足のかかとと、右足親指付け根に少し痛みを感じる。腫れてはいないのだが……(え? 両足かよ)。試しに歩いてみるとそこそこの痛みが来ているのがわかった(困ったなあ)。これは確実に痛風が起きている。こんなことは初めてだ、両足同時なんて。体温は37度台の微熱で推移している。ときに悪寒もする(スツキリしないね)。不安定だ。きっと身体は闘っているんだな、バランスを取り戻そうとして……。

(つづく)

